

アルファ・ロメオ・ガールズ

午前 8:30 前のポルテッロ工場の入口では、アルファ・ガールズが早足でロッカー・ルームに向かう。彼女らの多くは、ブローナ駅やバス停で必然的に一緒になってやって来る。赤、黒、ベージュ、茶色のスプリングコートを着た彼女たちは、まるでカラフルなパレットのようだ。

幼稚園や学校へ子供たちを送り迎えして時間といつも闘う既婚の女性たちがいて、婚約者がいる女性たちがいて、そして「フリー」な女性たちがいる。そんな「フリー」の彼女たちの多くは、仕事仲間の中にアモーレをすぐに見つけるのだ。



始業を知らせる最後のチャイムがなると、彼女たちアルファ・ガールズは機械設備や計算機、タイプライターを操るために次々と職場に入ってくる。まるで軍隊のように、整然として無言で、いつでも仕事の手伝いができるように、また、どんな些細な問題にもまじめに責任感を持って対処できるように準備が出来ている。彼女たちは俊敏かつ正確で、疲れたときや気分の悪いときでさえ笑顔を作ることが出来るのだ。

アルファ・ガールズの着用したエプロン（仕事着）の色は、70年代の初めまでは黒、その後は青色が選ばれた。また、データ解析センターでは白いエプロンを着用した。50年代末までは従業員は各自で購入しなければならなかったそうだが、その後は既製品が支給され、縫製して作れるように生地での支給もあった。各々が自分好みで仕立てるために、アルファ・ガールズのエプロンはみな同じデザインというわけではなく、かわいいドレス風に仕立てられたものもあった。一方、アルファ・ガールズのすべてがそれを喜んで着用していたわけではなく、それを女性にとっては屈辱的で女性差別につながるものだと感じていたアルファ・ガールズもいた。特に事務職でそれを着用しない男性社員をよく目にするアルファ・ガールズにその傾向は強かったようだ。

Le Ragazze dell'Alfa Romeo

アルファ・ガールズは仕事とサラリーを平等に与えるよう抗議をし始める。出世の可能性がほとんどない階段の一番後ろのステップに追いやられていると感じていたからだ。1970年の春、この問題に対する意識を高めたアルファ・ガールズは立ち上がることになった。当面の目標を考え、それを実現させる方法を探るべく研究グループを組織すると、それは興味深い経験になるだろうことがわかってきた。その活動は女性の仕事の解放へのステップとなり、1979年に初めて11人のアルファ・ガールズが鑄造の仕事を任されることにつながった。

休憩時間になると、アルファ・ガールズは席を離れて集い始める。その笑い声は鳥のさえずりのようで、アルファ・ガールズが走るときの足音は陽気なリズムのようだ。一日の仕事を終えると、タイムカードを押しに駆けていく。まだ彼女たちの一日は終わっていない。家に帰り、幾千もの違ったことをするのだ。

アルファ・ガールズがオフィスや生産ラインでの仕事に果たした貢献は重要なものであった。たとえそれがいつも男性社員の貢献に勝るものではなかったとしても。数多くのアルファ・ロメオについて書かれた書籍のページをめくってみても、女性についての記述を目にすることはない。女性レーシングドライバーでさえ記述されていない。そうであっても、歴代会長、デザイナー、テクニカル・エンジニアは女性のアシストとサポートを受けてきたのだ。プロとして仕事に専心し、栄光に満ちたメーカーに所属するプライドをもって一日一日こつこつと働き、アルファ神話を創りあげるのに貢献してきたのだ。

[Elvira Ruocco \(elvira.ruocco@alfasport.net\)](mailto:elvira.ruocco@alfasport.net)